

積奠と齒冑の礼

——中国中世の皇太子と儀礼——

はじめに

中国のみならず、儒学は東アジアにとって切り離すことができないものである。その儒学を振興するために孔子を祭った儀式が積奠である。しかし元々は孔子に限らず、広く国の先聖や先師を祭る儀式のことであった。積奠について、『礼記』文王世子には、

凡そ学にて、春は官其の先師に積奠す。秋冬も亦た之の如くす。
凡そ始めて学を立つる者は、必ず先聖・先師に積奠す。

（凡学、春官積奠于其先師。秋冬亦如之。凡始立学者、必積奠于先聖先師。）

とあり、積奠の様子が記されている。積奠は初めて学問を治めようとするものが、先聖・先師を祭る行為であり、三国時代の魏から唐で頻繁に行われた。その中で次第に孔子やその弟子が祭られ、積奠の形が完成していくのである。

積奠については、これまで多くの研究が行われてきた。しかしそのほとんどが、教育史や儀礼を明らかにするために積奠を研究するものであった⁽¹⁾。

だが、儒学の振興のために行われたとされている積奠には、一方でそれ以外の役割も担っていた。松浦千春氏は、特に魏晋時代の積奠を取り上げ、積奠を行うのが幼年皇帝もしくは皇太子で、ほぼ元服の時期と同時であることから「帝位継承過程の通過儀礼」として認識され、皇帝・皇太子の帝権を担うに足る人格の完成を表示したとしている⁽²⁾。その後、南朝から次第に積奠の時代的特異性が無味乾燥な解釈学によって礼經典の普遍性の中に吸収・同化されつつあったと述べる。

その後の積奠について松浦氏は、魏晋時代に重視された積奠が次第に魏晉ほど重視されなくなり、唐に至っては、「高祖・太宗ともに実施しているが儒教・国学振興政策の範囲のもので、逆に南朝の在り方とはまた異なった側面をもっている⁽³⁾。」として、相当な変化があった、というに止まる。

確かに、魏晉南朝と唐では積奠に大きな変化が見られる。しかし唐

千田 豊

においても皇太子による積奠は多く見られ、その意義は国学振興政策に留まらないように見受けられる。

また積奠を行う皇太子自体に着目しても、漢に比べて南朝の皇太子の実務への関与が非常に大きいものであったように⁽⁴⁾、皇太子制度自体の変化も魏晉南北朝時代から見られるようになってくる。このように積奠と皇太子制度の変化は時期をほぼ同じくしており、ここに魏晉から唐までの皇太子、ひいては皇帝権について理解する上で重要な手がかりがあるように思われるのである。

本稿では、積奠を行う皇太子に注目し、まず皇太子による積奠の起源とその系譜について一瞥する。そして唐代の積奠ではこれまでと異なり、齒胃が重視されたことに言及する。これらのことから前近代において皇太子が行う積奠がどのような意味を持ったのか、ということについて考察し、それによって魏から唐までの積奠の実態、また皇太子制度を解明する一助としたい。

一 積奠礼の系譜 —— 魏晉から唐まで ——

本節では積奠制度の変遷について、魏晉南朝、北朝、唐の各時代について順を追って見ていきたい。

(一) 魏晉南朝における積奠

最初に積奠について記した史書は沈約『宋書』である。『宋書』巻一七、礼志には、

魏の齊王正始二年三月、帝『論語』を講じて通し、五年五月、『尚書』を講じて通し、七年十二月、『礼記』を講じて通す。並びに太常をして積奠せしめ、太牢を以て孔子を辟雍に祀り、顔淵を以て配す。

(魏齊王正始二年三月、帝講論語通、五年五月、講尚書通、七年十二月、講礼記通。並使太常積奠、以太牢祀孔子於辟雍、以顔淵配。)とあり、魏の齊王の積奠について述べられている。『三国志』巻四、三少帝紀、齊王にもこれに対応する記事はあるが、「積奠」の語は見られない。同じく『宋書』巻一七、礼志に、

晉の武帝泰始七年、皇太子は『孝經』を講じて通し、咸寧三年、『詩』を講じて通し、太康三年、『礼記』を講じて通し、惠帝元康三年、皇太子は『論語』を講じて通す。元帝太興三年、皇太子は『論語』を講じて通し、太子並びに親ら積奠し、太牢を以て孔子を祠り、顔淵を以て配す。成帝咸康元年、帝は『詩』を講じて通し、穆帝升平元年三月、帝は『孝經』を講じて通し、孝武寧康三年七月、帝は『孝經』を講じて通し、並びに積奠すること故事の如し。穆帝、孝武並びに^か権りに中堂を以て太学と為す。

(晉武帝泰始七年、皇太子講孝經通、咸寧三年、講詩通、太康三年、〔講礼記通、惠帝元康三年、皇太子〕講論語通。)、元帝太興三年、皇太子講論語通、太子並親積奠、以太牢祠孔子、以顔淵配。成帝咸康元年、帝講詩通、穆帝升平元年三月、帝講孝經通、孝武寧康

三年七月、帝講孝經通、並積奠如故事。穆帝、孝武並權以中堂為太学。）

とあって、両晋でもしばしば積奠が行われている。

また劉宋においても晋と同じように積奠が行われたことが、次の『宋書』卷一七、礼志の記事からわかる。

宋文帝の元嘉二十二年四月、皇太子『孝經』を講じて通し、国子学に積奠すること、晋の故事の如し。

（宋文帝元嘉二十二年四月、皇太子講孝經通、積奠国子学、如晋故事。）

記事からこの時期の積奠は皇帝或いは皇太子が、太学などで先聖・先師を祀り、その際、『孝經』や『論語』などを講じるのが普通であったことがわかる。『礼記』には、積奠の語が見られるが、講經を行つたかどうかについては不明である。後漢から講經がみられ、これが積奠における講經の起源となった⁽⁶⁾。

齊王の講学を中心とした積奠は、晋王朝にも受け継がれ、南朝での積奠も両晋の積奠が儀式的な形となったと考えられる。特に魏晋時代の積奠については松浦千春氏の論文に詳しい。

松浦氏は、齊王芳が先帝である明帝の実子でないことから、血の正当性が無いゆえに、講經によって表徴されたであろう「好學・聰明の少年天子」像を象徴しようとしたとする。また晋の惠帝が皇太子の時

に行つた積奠についても、惠帝が「不慧」といわれていたことから、惠帝は嫡長子として血の正当性については完全といつてよく、講經によつて能力的な正当性を儀礼的象徴によつて表示しようとした、と述べている。その後、東晋南朝を経て、積奠は「帝位繼承過程の通過儀礼」として認識されていった、とする⁽⁷⁾。

では実際に劉宋以後の積奠はどのようなものであつたのか。『南齊書』卷九、礼志に、

永明三年正月、詔して学を立つ。創めて堂宇を立て、公卿子弟を召し、下は員外郎の胤に及び、凡そ生二百人を置く。其の年の秋中に悉く集う。：（中略）：其の冬、皇太子『孝經』を講じ、親ら積奠に臨み、車駕幸して聴く。

（永明三年正月、詔立学。創立堂宇、召公卿子弟、下及員外郎之胤、凡置生二百人。其年秋中悉集。：（中略）：其冬、皇太子講孝經、親臨積奠、車駕幸聴。）

とあり、南齊の永明三年（四八五）に学が立ち、学生が二百人置かれ、積奠が行われることになった。

その後、梁・陳でも積奠は引き続き行われた。『隋書』卷九、礼儀志に、

梁の天監八年、皇太子積奠す。：（中略）：又た有司以為らく、「礼に云ふ、『凡そ人の子為るは、升降阼階に由らず。』と。案ずるに

今学堂に凡そ三階有り。愚謂へらく客若し等を降らば、則ち主人の階に従う。今先師堂に在り、義として尊敬する所なれば、太子宜しく阼階より登り、以て師に従うの義を明かにすべし。若し積奠の事訖らば、宴会の時は、復た先師の敬無し、太子堂に升るは、則ち宜しく西階よりし、以て阼に由らざるの義を明らかにすべし。」と。

(梁天監八年、皇太子積奠。：(中略)：又有司以為、「礼云、『凡為人子者、升降不由阼階。』案今学堂凡有三階、愚謂客若降等、則從主人之階。今先師在堂、義所尊敬、太子宜登阼階、以明從師之義。若積奠事訖、宴会之時、無復先師之敬、太子升堂、則宜從西階、以明不由阼義。」)

とあり、ここでは具体的に積奠における皇太子の立場が議論されている。梁での積奠は南斉に較べてより師への尊敬が全面に押し出されている。岡安勇氏によると、「師に礼する場合は東面・西面の席が設けられ、師は東面の席に就けられていた」とする⁽⁸⁾。阼階は東階を指しており、東から登るということは皇太子が西面することを示す。つまりこれは、皇太子が弟子として礼を行うことを表しているのである。『隋書』礼儀志はこれに続けて、

吏部郎徐勉議すらく、「鄭玄云へらく、『命士由り以上は、父子宫を異にす』と。宮室既に異なれば、阼階に由らざるの礼無し。請うらくは積奠及び宴会、太子堂に升るは、並びに宜しく東階由り

すべし。若し輿駕學に幸せば、自然として中階よりす。又た『東宮元会儀注』を検ぶるに、「太子崇正殿に升るは、東西の階を欲せず」とあり。東宮典儀の列に云う『太子の元会は、西階自り升る』を責む。此れ則ち相承けて謬りと為す。請うらくは今より東宮の大公事、太子崇正殿に升るは、並びに阼階に由るべし。其れ賓客と預会するは、旧に依りて西階よりす。」と。

(吏部郎徐勉議、「鄭玄云、『由命士以上、父子異宮』。宮室既異、無不由阼階之礼。請積奠及宴会、太子升堂、並宜由東階。若輿駕幸學、自然中階。又檢東宮元会儀注、太子升崇正殿、不欲東西階。責東宮典儀、列云『太子元会、升自西階』。此則相承為謬。請自今東宮大公事、太子升崇正殿、並由阼階。其預会賓客、依旧西階。」)

とあって、積奠が皇太子にとって「東宮の大公事」として認識されていることがわかる。梁では、昭明太子・簡文帝が積奠を行い、また陳においても、後主・呉興王胤が、積奠を行っている。つまり、特に南朝において皇太子は基本的に積奠を行うことになっていたのである。

(二) 北朝における積奠
では、次に北朝の積奠はどうであったか。北魏の積奠については、『魏書』卷九、肅宗紀に、

正光元年春正月乙酉、詔して曰く、「国を建て民を緯おさむるは、教えを立つるを本と為し、師を尊び道を崇ぶ。茲の典昔よりす。来

歳の仲陽、節和の氣潤、孔顔を積奠するは、乃ち其の時なり。有司予め国学を繕い、図りて聖賢を飾り、官を置き牲を簡にし、吉を択び礼を備うべし。」と。

（正光元年春正月乙酉、詔曰、「建国緯民、立教為本、尊師崇道。茲典自昔。來歲仲陽、節和氣潤、積奠孔顔、乃其時也。有司可予繕国学、図飾聖賢、置官簡牲、択吉備礼。」）

とある。翌年の正光二年（五二二）に積奠は行われたが、時はすでに北魏王朝の末期であった。また、『魏書』卷六七、常景伝に、その時の積奠について記されている。

時に肅宗講学の礼を国子寺に行い、司徒崔光経を執り、景と董紹・張徹・馮元興・王延業・鄭伯猷らに勅して俱に録義を為さしむ。事畢り、又た積奠の礼を行い、並びに百官に詔して積奠の詩を作らしむるに、時に景の作を以て美と為す。

（時肅宗行講学之礼於国子寺、司徒崔光執経、勅景与董紹・張徹・馮元興・王延業・鄭伯猷等俱為録義。事畢、又行積奠之礼、並詔百官作積奠詩、時以景作為美。）

この史料から正光二年では、当時十二歳であった孝明帝自ら積奠を行つたことがわかる。また晋南朝において講経の後に積奠が行われていることから、北魏でも講経と積奠はセットで行われるものであった。しかし、南朝とは異なる点も見られる。それは執経の存在である。正

光二年の積奠では、崔光が経を執り講経を行っている。このことは崔光伝や、儒林伝にも記されており⁹⁾、崔光が『孝経』を講じている。北魏では、永熙三年（五三四）に武帝が積奠を行つており、ここでも『孝経』・『礼記』・『大戴礼』夏小正篇が講じられているが、すべて主祭者以外が講じている¹⁰⁾。これは北朝全てに通じて言えることである。

また北齊では、『隋書』卷九、礼儀志に、

後齊の制、新たに学を立つれば、必ず積奠して先聖先師を礼し、毎歲春秋二仲には、常に其の礼を行う。月旦ごとに、祭酒博士已下及び国子諸学生已上を領し、太学・四門博士堂に升り、助教已下・太学諸生は階下にて、孔を拝し顔を揖す。日出でて事を行うに至らざれば、之を記して一負と為す。雨服を霑せば則ち止む。学生十日毎に飯を給し、皆丙日を以て之を放つ。郡学は則ち坊内に孔・顔の廟を立て、博士已下、亦た月毎に朝すると云う。

（後齊制、新立学、必積奠礼先聖先師、毎歲春秋二仲、常行其礼。毎月旦、祭酒領博士已下及国子諸学生已上、太学・四門博士升堂、助教已下・太学諸生階下、拜孔揖顔。日出行事而不至者、記之为一負。雨露服則止。学生每十日給飯、皆以丙日放之。郡学則於坊内立孔・顔廟、博士已下、亦毎月朝云。）

とある。この時代には積奠が毎年二月と八月の二度行われるようになり、毎月祭酒や学生は孔子を拝するようになった。

北朝での積奠は南朝よりも圧倒的に少なく、その詳細も不明なこと

が多い。しかし、講經を皇太子自身が行わないことと、北斉で積奠が毎年行われるようになったことは、南朝にはなかったことである。そしてこれは唐に受け継がれるのである。

(三) 唐における積奠

唐代では安史の乱までは、皇太子による積奠が行われていたが、それ以後は関係する記事が見られなくなる。唐代で最初の積奠は、高祖の武徳七年（六二四）である。

『旧唐書』卷一、高祖紀に、

（武徳七年）丁巳、国子学に幸し、親ら積奠に臨む。

（丁巳、幸国子学、親臨積奠。）

とあり、また次の太宗においても、『旧唐書』卷三、太宗紀に、

（貞観十四年）二月丁丑、国子学に幸し、親ら積奠し、大理・万
年の繫囚を赦し、国子祭酒以下及び学生の高第にて精勤せし者に
一級を加え、帛を賜うに差有り。

（二月丁丑、幸国子学、親積奠、赦大理・万年繫囚、国子祭酒以
下及学生高第精勤者加一級、賜帛有差。）

とある。この二つの史料から、皇太子が積奠を行うのではなく、高祖・太宗が自ら積奠を行っているようにみえる。しかし、後に玄宗の命に

よつて編纂される『大唐開元礼』には皇太子による積奠や国子による積奠、諸州による積奠についてのみ記載されており、皇帝による積奠についてはどこにも記されていない。そこで高祖の積奠を他の史料から見直してみると、『旧唐書』卷一八九上、徐文遠伝に、

武徳六年、高祖国学に幸し、積奠を觀、文遠をして春秋の題を發せしむ。諸儒は難きを設け蜂起するに、方に随い占対し、皆能く屈すること莫し。

（武徳六年、高祖幸国学、觀積奠、遣文遠發春秋題、諸儒設難蜂起、隨方占対、皆莫能屈。）

とあつて、ここでは高祖が国学に行幸し、積奠を「觀」たとされている。また太宗についても、『旧唐書』卷二四、礼儀に、

貞観十四年三月丁丑、太宗国子学に幸し、親ら積奠を觀る。
（貞観十四年三月丁丑、太宗幸国子学、親觀積奠。）

とあり、高祖と同じように「觀」とされている。太宗はこの時の積奠で、祭酒であり『孝經』を講じた孔穎達に対して質問を行っているが、積奠を行うのはあくまで皇太子であつただろう。つまり、唐代の積奠は基本的に皇太子が行う祭祀であつたということができる。

ちなみに隋も一度高祖が積奠を行ったとされているが、ここでも『隋書』の儒林伝に、「觀積奠之礼」とあり、皇太子が主催者として積奠

を行つたと推測できる⁽¹⁾。

おそらくここで「観」とされているのは、皇帝の視学であつたと考えられる。『大唐六典』卷二一、国子監に、「皇帝視学、皇太子鹵胃は、則ち執経講義す。（皇帝視学、皇太子鹵胃、則ち執経講義）」とあり、『新唐書』や『大唐開元礼』⁽²⁾にも皇帝視学について細かい儀式次第が残っている。このことから、「観積奠之礼」とあるのは皇帝の視学であつたことを示しており、積奠の主祭者は皇太子であつたとするのが妥当である。

また高祖の積奠については、『旧唐書』の本紀に武徳七年とあるが、徐文遠伝には武徳六年とある。このことについて多賀秋五郎氏、高明士氏⁽³⁾は二度積奠を行つたとしているが、『旧唐書』の高祖紀や礼儀志、陸徳伝、『通典』などにはすべて武徳七年に積奠を行つたと記されており、武徳六年の積奠に関する記述は徐文遠伝のみである。普通積奠は一人につき一度行い、二度行つたと明確にわかるのは後の玄宗が皇太子であつたときだけで、他に例はない。この時行われた積奠は武徳七年の一回であつたと考えるべきである。

唐代で積奠を行つたと考えられる皇太子は、建成・承乾・治（後の高宗）・弘・哲（後の中宗）・隆基（後の玄宗）・瑛であり、安史の乱以前の皇太子は基本的に積奠を行っている。

以上のように、皇太子による積奠を取り上げ、積奠の起源と変化を整理してみたところ、積奠は時代が下る度に少しずつ変化していることがわかる。その変化を順におつてみると、まず魏晉では皇太子もしくは幼年皇帝が積奠を行い、その中で講経を行っている。この講

経は複数回行われることもある。よつて魏晉の積奠では講経が重視されていたと考えられる。南朝になると、積奠は皇太子だけが行うようになる。また講経についても一度しか行われない。北朝では積奠で講経を行つても、主祭者である皇帝もしくは皇太子が執経をしなくなつた。唐も南朝と同じく基本的に皇太子が積奠を行うが、講経は国子祭酒などが行い、皇太子が行うことはなかった。また積奠を行う年齢については、魏晉南朝の積奠を行う年齢がほとんど十代、遅くても二十歳なのに対して、唐の積奠は弘以外すべて二十歳を越えており、哲や隆基に至つては二六歳で積奠を行っている。この原因については後に詳しく述べる。

二 『大唐開元礼』に見える積奠

次に『大唐開元礼』に残されている皇太子積奠の儀式次第から、唐代の積奠の意義を考察したい。

唐代の積奠は中祀に分類され、『大唐開元礼』の吉礼に「皇太子積奠於孔宣父」として記載されている。積奠は、斎戒・陳設・出宮・饋享・講学・還宮の順番に行う。この儀式の中心となるのが、饋享である。『大唐開元礼』卷五三、「皇太子積奠於孔宣父」には、

享日未明十五刻、太官令 宰人を帥いて鸞刀を以て牲を割き、祝史は豆二つを以て毛血を取り饌所に置き、遂に牲を烹る。未明五刻、郊社令 其の属及び廟司を帥い各おの其の服を服せしめ、升

り先聖の神座を堂上の西楹の間に、東向して設く。先師の神座を先聖の神座の東北、南面して西上に設く。席皆莞を以てす。神位を各おの座首に設く。

（享日未明十五刻、太官令帥宰人以鸞刀割牲、祝史以豆二取毛血置於饌所、遂烹牲。未明五刻、郊社令帥其属及廟司各服其服、升設先聖神座於堂上西楹間、東向。設先師神座於先聖神座東北、南面西上。席皆以莞。設神位各於座首。）

とあり、先聖は堂上の西に東向きで置かれ、先師は先聖の東北、南向きに置かれていたことがわかる。皇太子の座は堂の東階の東南、西向きにあり⁽¹⁴⁾、ここから堂上に上がり、儀式を執り行ふ。前述したように『隋書』卷九、礼儀志にも、「今先師堂に在り、義は尊敬する所、太子宜しく阼階を登り、以て明らかに師の義に従うべし。」とある。これは師を尊敬する時は阼階、つまり東階を升る必要があり、これは師が東面していることを示す。従つてこの席次はいうなれば、先聖・先師に対して皇太子が弟子としての姿勢を執っていることを示している。また同史料には、

太祝は各おの跪き幣を簠に取り、尊所に興立す。率更令は皇太子を引きて、永和の楽作れば、皇太子は東階より升り、左庶子以下及び左右侍衛は人を量りて従いて升る。皇太子は堂に升り、先聖の神座の前に進み、西向して立つ。楽止めば、太祝は幣を以て左庶子に授け、左庶子は幣を奉り北向きに進み、皇太子は措笏して

幣を受く。登歌し、肅和の楽を作し、南呂の均を以てす。率更令は皇太子を引きて進み、西面して跪きて先聖の神座の前に奠り、俛伏し、興く。率更令は皇太子を引きてやや退き、西向きて再拜す。訖え、率更令は皇太子を引きて先師の首座の前に進み、北向きに立つ。又た太祝は幣を以て左庶子を授け、左庶子は幣を奉り西向きに進み、皇太子は幣を受け、率更令は皇太子を引きて進み、北向きに跪きて先師の首座を奠り、俛伏し、興き、率更令は皇太子を引きて少や退き、北向きに再拜す。

（太祝各跪取幣於簠、興立於尊所。率更令引皇太子、永和之樂作、皇太子自東階升、左庶子以下及左右侍衛量人従升。皇太子升堂、進先聖神座前、西向立。楽止、太祝以幣授左庶子、左庶子奉幣北向進、皇太子措笏受幣。登歌、作肅和之樂、以南呂之均。率更令引皇太子進、西面跪奠於先聖神座前、俛伏、興。率更令引皇太子少退、西向再拜。訖、率更令引皇太子進先師首座前、北向立。又太祝以幣授左庶子、左庶子奉幣西向進、皇太子受幣、率更令引皇太子進、北面跪奠於先師首座、俛伏、興、率更令引皇太子少退、北向再拜。）

とあるように、初めに皇太子は先聖・先師に幣を奠る。上述したように、『礼記』文王世子には、「事を行うに及びて、必ず幣を以てす。（及行事、必以幣。）」とあり、積奠を行う際、幣は重要な道具と認識されていた。幣とは、帛のことでこれは贈り物を意味する束帛であったと考えられる。積奠において、幣が重要であった理由はこの束帛にあつ

た。『大唐六典』卷二一、国子博士に、

其の生初めて入るに、束帛一篋・酒一壺・脩一案を置き、号して束脩の礼と為す。

（其生初入、置束帛一篋・酒一壺・脩一案、号為束脩之礼。）

とあるように、普通学生が師に教えを請う場合、つまり学に入る際には束脩の礼を行っている。また国子生だけでなく、太学や四門学など他の学校でも国子学のように束脩の礼が行われていた¹⁵。これは皇帝の子である皇子も例外ではなく、同じく『大唐開元礼』卷五四には皇子束脩の儀式も「束帛一篋、酒一壺、脩一案を饗る」とあり、その内容はほぼ同様である¹⁶。これらは上述した『大唐六典』と一致し、学生はどのような身分であっても、束脩の礼を行い学に入ることになっていた。幣が積奠礼にとって重要だったのは、師の教えを請うために必要な贈り物で、欠かせないものであったからである。

『大唐開元礼』にある積奠礼について詳しく見ると、饋享は先聖・先師に対して、皇太子が弟子となるための礼である束脩を意識して行われていたことがわかった。その席次も皇太子が弟子であることを視覚化したものであった。つまり、積奠は皇太子にとっての入学の礼であったといえる。

積奠が入学の礼であるとして魏晋南北朝の積奠をもう一度見てみると、『梁書』卷二、武帝紀には、

（天監九年三月）乙未、詔して曰く、「王子学に従い、礼経より著わる。貴遊咸^み在るは、実に前誥を惟う。式て義方を広くし、克く教道を隆んにする所以なり。今成均 大いに啓き、元良は蘭譲し、斯れより以降、並びに宜しく業を肆^なうべし。皇太子及び王侯の子、年の従師に在る者は、学に入らしむべし。」と。

（乙未、詔曰、「王子従学、著自礼経。貴遊咸在、実惟前誥。所以式広義方、克隆教道。今成均大啓、元良蘭譲、自斯以降、並宜肄業。皇太子及王侯之子、年在従師者、可令入学。」）

とある。これは当時の皇太子である統（昭明太子）が、積奠を行った次の年に出された詔勅である。また『陳書』卷二六、徐孝克伝にも、

至徳中、皇太子学に入り積奠し、百司は列に陪^{した}い、孝克は孝経の題を発す。後主は皇太子に詔して北面して敬を致さしむ。

（至徳中、皇太子入学積奠、百司陪列、孝克発孝経題。後主詔皇太子北面致敬。）

とある。この至徳中は、至徳三年に呉興王胤が行った積奠の事を指しており、学に入るという意図が積奠に含まれていたと推測される。

また皇太子だけでなく、皇帝についても、『初学記』卷十八に引く王隱晋書に、

魏の高貴郷公の学に入るや、将に先典を崇ばんとす。乃ち王祥に

命じて三老と為し、侍中鄭小童を五更と為す。祥は几杖に南面し、師道を以て自ら居り、帝は北面して言を乞う。

（魏高貴鄉公之入学也、將崇先典。乃命王祥為三老、侍中鄭小童為五更。祥南面几杖、以師道自居、帝北面乞言。）

とあつて、皇帝も学に入ることがあつた。高貴郷公は積奠を行ったとされる記述は見られないが⁽¹⁷⁾、おそらく幼い皇帝が入学の礼として積奠を行うことについて不自然ではなかったと考えられる。

また北朝については、史料が少なく詳細はわからないが、前述の、『魏書』卷九、肅宗紀に、「国を建て民を緯^{おさ}むるは、教えを立つるを本と為し、師を尊び道を崇ぶ。」とあり、積奠を行うのは師を尊ぶためであることが読み取れる。よつて魏晋南朝と比べて、その主旨に大きな差はなかったと考えられる。

以上のことから、皇太子の積奠が、入学の礼として行われていたと推測されるのである⁽¹⁸⁾。

では、入学の儀礼としての積奠が、特に唐の皇太子にとつてどのような意味を持ったのだろうか。次節で考察していきたい。

三 積奠と齒冑の礼

(一) 齒冑の礼

唐の玄宗の治世になると、積奠礼にこれまでと異なった記述が見られるようになる。『新唐書』卷十五、礼樂志には、

玄宗の開元七年、皇太子は学に齒冑して、先聖に謁す。詔して宋璟を亜献とし、蘇頌を終献とす。享るに臨むや、天子は齒冑の義を思い、乃ち詔して二献皆冑子を用い、先聖を祀るに積奠の如くせしむ。

（玄宗開元七年、皇太子齒冑於学、謁先聖。詔宋璟亜献、蘇頌終献。臨享、天子思齒冑義、乃詔二献皆用冑子、祀先聖如積奠。）

とあり、ここでは玄宗の皇太子である瑛の積奠を、積奠ではなく齒冑として記載し、先聖を祀る際に積奠のように行ったとしている。では、この齒冑とは何か。積奠とどのような関係にあるのか。唐代の積奠を考察するに当たり検討する必要があると考える。

齒冑礼については、積奠儀礼の中で研究されることはほとんどなかった。ただ松浦氏は上述した『新唐書』の「積奠の如し」という記述に触れ、「この「齒冑礼」は積奠儀礼とは別個のものとみなされていたようである。内容からすれば「入学・御講学始」の儀式といったところであろうか⁽¹⁹⁾。」と述べ、唐代の積奠についての展望を述べている。

また蓋金偉氏は、齒冑と積奠について、「皇太子齒冑礼は国子学積奠礼の中の一つの重要なポイントである」と言及している⁽²⁰⁾。

さらに古勝隆一氏は、「「齒冑之礼」とは魏晋以来の「積奠礼」の唐代的呼称であり、皇太子が元服を目前にひかえ国子学に入学するにあたり、先聖・先師を祀る儀礼であつた。」と述べている⁽²¹⁾。しかし唐の積奠は基本的に、二十代で行い、元服と積奠の相関関係はほとん

と見られない。よって元服を目前にひかえ国子学に入學するにあたる、
とは言い難いのである。

まず、齒胃礼とはどのような儀礼であつたのかについて考察してい
きたい。

初めに、「齒」と「胃」にはどのような意味があるのか。「齒」につ
いては、『春秋左氏伝』隱公十一年に、

寡人若し薛に朝せば、敢えて諸任と齒せじ。〔注：齒は、列なり。〕
〔疏：『礼記』文王世子に、曰く、「古えは年齢と謂う。齒も亦た
齡なり。」と。然らば則ち齒は是れ年の別名なり。人年齒を以て
相次ぎ列し、爵位を以て相次ぎ列すも亦た名づけて齒と為す。故
に齒と云うなり。〕

〔寡人若朝于薛、不敢与諸任齒。〔注：齒列也。〕〔疏：『礼記』文
王世子曰、「古者謂年齡、齒亦齡也。」然則齒是年之別名。人以年
齒相次列。以爵位相次列亦名為齒、故云齒也。〕〕

とあり、「齒」は年齢による序列であつた。では、「胃」とは何か。『説
文解字注』によると、「胃、胤也」とある。また、『尚書』の舜典に、「教
胃子。〔注〕胃、長也。」とあることから、「胃」はあと継ぎや長男と
いう意味があつたことがわかる。学に関係する齒については、『礼記』
王制に、

王の太子、王子、群后の太子、卿・大夫・元士の適子、国の俊選、

皆造る。凡そ学に入るときは齒を以てす。

〔王太子、王子、群后之太子、卿・大夫・元士之適子、国之俊選、
皆造焉。凡入学以齒。〕

とあり、それぞれの身分の者が学に入る時に、年齢によって序列が決
まるとされている。つまり齒胃とは、学に入る時、様々な身分の長子
が、身分によらず年齢によって序列を定めたものであつた。

齒胃という熟語は唐以前にみられないが、西晋では、すでに積奠と
齒・胃の関係が見て取れる。『晋書』卷五五、潘尼伝には、潘尼の積
奠頌が残されており、その中で西晋の積奠についての考え方をうかが
い知る事ができる。

其の辞に曰く、：（中略）：篤生の上嗣、期を繼ぎて挺秀なり。
聖敬日躋^{のぼ}り、濬哲閎茂る。儒術を留精し、古訓を敦閱す。道に遵
い齒に譲り、心を降し問いを下す。舗するに金声を以てし、光す
るに玉潤を以てす。日の升るが如く、乾の運^めるが如し。：（中略）
：莘莘たる胃子、祁祁たる学生。心を洗い自ら百^もめ、国の栄えを
観る。

〔其辞曰、：（中略）：篤生上嗣、繼期挺秀。聖敬日躋、濬哲閎茂。
留精儒術、敦閱古訓。遵道讓齒、降心下問。舗以金声、光以玉潤。
如日之升、如乾之運。：（中略）：莘莘胃子、祁祁学生。洗心自
百、觀国之榮。〕

ここで注目されるのは、「道に違ひ齒に譲り」や、「莘莘たる胄子、祁祁たる学生」というように、年齢による序列や胄子が意識されていることである。魏では見られないが、西晋の積奠ではすでに齒胄と関連する考え方が頌に残されているのである。

さらに、『初学記』巻一四の積奠に引く何承天「積奠頌」には、

乃ち昔の孔顔、周を夢み虞を希う。天より美より、代を異にするも符を同じうす。修を経て治を講じ、幾を研め理を識る。貴を道い業を崇び、尊を降して齒を尚ぶ。

（乃昔孔顔、夢周希虞。自天由美、異代同符。經修講治、研幾識理。道貴崇業、降尊尚齒。）

とある。何承天は、初め東晋に仕え、後に宋に仕えた人物で、元嘉十九年（四四二）、宋に国子学が立てられると、国子博士を兼任し、積奠に参加している。よってこの積奠はおそらく元嘉二十二年の太子劭の時に行われたものであったと推測される。齒についての考え方も、潘尼の積奠頌と違いはない。

また胄子についても、同じく『初学記』巻一四の積奠に引く傅咸の皇太子「積奠頌」には、

臺臺たる皇儲、闕里に希心す。濟濟たる儒生、旣旣たる胄子。
（臺臺皇儲、希心闕里。濟濟儒生、旣旣胄子。）

とある。積奠頌にはしばしばきまり文句として見られており、齒と胄子が積奠には欠かせないものであった。このようにして、次第に唐に至り、齒と胄子が齒胄という熟語になっていったのではないだろうか。唐代になり、齒と胄子は齒胄という言葉として定着するが、それは後継たる者（胄子）たちが学に入る際に、それぞれの身分ではなく年齢によって序列が決まること（齒）を示す礼であり、皇太子もこれに準ずるものであった。前述したように、『大唐開元礼』からみると、積奠は入学の礼である。『礼記』王制の記述から、入学の際の心構えとして、齒胄の考え方は当然晋や南朝・唐の人々にあったと考えられる。齒胄は当然のように守られるべき礼であったために、唐より以前では話題になることはほとんどなかったのである。よって齒胄はそもそも蓋金偉氏のいう、積奠礼の中にある一つの重要なポイントとしてあったとはいえない。齒胄はあくまで学ぶ際に求められる礼であり、齒胄と積奠の関係が北朝では、管見の限り見受けられないにもかかわらず、唐になってそれをわざわざ取り上げたことに興味深い点があるといえるのである。

この節の初めに、唐代では、積奠礼と齒胄礼が同義であるかのように述べられていることを取り上げた。よって次に唐の齒胄について考察していきたい。

（二）唐における齒胄と積奠

唐代では皇太子に関連して、齒胄の言葉が度々見られるようになる。特に唐代においての齒胄の意義を的確に示しているのは、太宗の最初

の皇太子であつた承乾を諫めるときに述べられたものである。

（貞観）十三年、又上書して諫めて曰く、「臣聞くならく周公は大聖の材を以て、猶お握髮吐飧し、白屋を引納するがごとし。而して況んや後の聖賢、敢えて斯の道を軽んずるをや。是を以て礼皇太子学に入らば齒冑を行うを制め、太子をして君臣・父子・長幼の道をしらしめんと欲す。然らば君臣の義・父子の親・尊卑の序・長幼の節、之を方寸の内に用い、之を四海の外に弘め、皆行いに因りて以て遠聞し、言を仮りて以て光被せんとす。…（中略）…臣恐るらくは殿下の敗徳の源、此れに在らんことを。」と。承乾並びに納ること能わず。（『旧唐書』卷七五、張玄素伝。）

（十三年、又上書諫曰、「臣聞周公以大聖之材、猶握髮吐飧、引納白屋。而況後之聖賢、敢輕斯道。是以礼制皇太子入学而行齒冑、欲使太子知君臣・父子・長幼之道。然君臣之義・父子之親・尊卑之序・長幼之節、用之方寸之内、弘之四海之外、皆因行以遠聞、仮言以光被。…（中略）…臣恐殿下敗徳之源、在於此矣。」承乾並不能納。）

また『冊府元龜』卷二六一、儲宮部、褒寵には、

皇太子承乾 抗表して詔に謝す。答えて曰く、「汝は家の冢嫡にして、国の儲罔なり。故に斯の命有り、以て殊有るを彰かにせんとす。学に入り齒冑するは、則ち君臣の義なり。」

（皇太子承乾抗表謝詔。答曰、「汝家の冢嫡、国之儲罔。故有斯命、以彰有殊。入学齒冑、則君臣之義也。」）

とある。これは張玄素と太宗が皇太子承乾を諫めたものである。これから皇太子が学に入り齒冑を行うことは、君臣・父子・長幼の道を天下に知らしめ、それによつて皇太子の權威を高めようとしていたことがわかる。

この齒冑は、立太子の時にも言及されている。『唐大詔令集』卷二八、冊代王為皇太子文には以下のようにある。

維れ永徽七年、歳は景辰に次り、正月景寅朔、六日辛未。…（中略）…朕虔んで靈図を奉じ、夙に丕業を膺く。仰ぎて七廟の重きを惟い、思いて万葉の慶を隆くす。列辟を疇咨し、前修を欽若す。是れ命を用いて爾を皇太子と為す。往け欽めや。爾其れ祇だ憲章を奉り、率いて軌度に由り、尽く齒冑を謙恭し、審らかに迎郊に方俗す。

（維永徽七年、歳次景辰。正月景寅朔、六日辛未。…（中略）…朕虔奉靈図、夙膺丕業。仰惟七廟之重、思隆万葉之慶。疇咨列辟、欽若前修。是用命爾為皇太子。往欽哉。爾其祇奉憲章、率由軌度、尽謙恭於齒冑、審方俗於迎郊。）

唐の永徽七年（六五六）に、高宗の五子で代王であつた弘が立太子されることになり、その時の詔勅に皇太子として齒冑を謙恭にするよう

に述べられている。

これだけでなく、唐代では、重俊（節愍太子）の名誉回復のために行われた冊贈や、立太子などにも菌胄の文字が見られるのである²²⁾。皇太子は菌胄を大事なものとして、その菌胄を百官の前で儀礼としてみせることで、皇太子自身の正統性を主張したと考えられる。それに利用されたのが唐以前から伝わる積奠であった。唐代では皇太子だけが積奠を行っていることもこれを証明している。

積奠に百官が参加するということは、皇太子以外の皇子も積奠に参加したと考えられる。皇太子が積奠を行い、他の皇子が年齢によって序列が決まっていただろう。それゆえに年齢が高い長子がより尊ばれることに繋がるのである。しかし、唐では長子でないものも多く立太子されている。彼らは年齢による序列を示す菌胄の礼を、百官の前で行うことで、長子と同等の身分を付け加えられたことを表したのである。これこそが、唐代の積奠であり、唐代において菌胄という言葉が出現し重視された理由なのである。唐は他の王朝と比べ、皇太子の廃立が多い。このことは唐の皇太子の地位が非常に不安定であったことを示す。唐代で菌胄礼が特に重要視されたことは、皇太子が他の皇子よりも後継者にふさわしいことを百官に示すためであったと推測される。

唐代において皇太子による積奠が重要であったことは、玄宗の二度の積奠からもわかる。玄宗は睿宗即位とともに立太子され、翌年景雲二年八月に積奠を行っている²³⁾。そしてその翌年二月、つまり六ヵ月後には二度目の積奠に臨んでいる。一度目の積奠は立太子にとも

なつて行われたもので、他の積奠と同様である。二度目の積奠は、おそらく睿宗の譲位に由来する。譲位という普通ではない帝位継承であったからこそ、権威をより高めるために積奠が重視されたと考えられる。

また南朝においても、積奠は百官を意識したものであった。南朝では、積奠を行った六人の内、陳朝の皇太子を除く四人の皇太子が監国など政治に深く関与している²⁴⁾。しかも監国は積奠の後に行われており、さらに早い段階から積奠が行われるのは、積奠が皇太子としての役割を果たせることを百官に印象付けるものであったと考えられるのである。監国は分裂期の時代にある皇太子にとって重要な役割の一つであった。齊の長懋（文惠太子）と梁の簡文帝（皇太子の時）の積奠が他の皇太子と比べて年齢が高いのも、これが理由であると考えられる。

ところで、宋代になると、菌胄は皇太子による積奠を指す言葉として定着するようになる。王圻『統文献通考』巻五九、学校考には、宋の菌胄について述べられている。

景定二年（一二六一）、皇太子に詔して孔子を太学に謁せしむ。手詔の略しに曰く、「虎闥の菌胄は太子の事なるに、此の礼廢すること久し。設奠舎菜の事、我が朝未だ嘗て廢せざるが如きなり。然るに師を敦くし道を敬うは又た旧制に拘るべからず、太子をして謁拝せしむべし。」と。

（景定二年、詔皇太子謁孔子于太学。手詔略曰、「虎闥菌胄太子事

也、此礼廢久矣。如設奠舍菜之事我朝未嘗廢也。然敦師敬道又不可拘旧制、可令太子謁拜焉。」

虎闕とは国子学のことであるが、これによると、宋では菌胄が廢され、「設奠舍菜の事」はまだ廢したことがないと述べる。「舍菜」とはつまり積奠のことである²⁵。唐代で同義であるかのように述べられている菌胄と積奠は、宋代では分けて述べられている。皇太子以外が行う積奠については、『旧唐書』卷二四、礼儀志に、

（貞觀）二十一年、詔して曰く、「左丘明・卜子夏・公羊高・穀梁赤・伏勝・高堂生・戴聖・毛萇・孔安国・劉向・鄭衆・杜子春・馬融・盧植・鄭玄・服虔・何休・王肅・王弼・杜預・范甯・賈逵総じて二十二座とし、春秋二仲、積奠の礼を行う。」と。儒官を以て自ら祭主と為し、直だ博士の姓名のみ云い、先聖に昭告す。（二十一年、詔曰、「左丘明・卜子夏・公羊高・穀梁赤・伏勝・高堂生・戴聖・毛萇・孔安国・劉向・鄭衆・杜子春・馬融・盧植・鄭玄・服虔・何休・王肅・王弼・杜預・范甯・賈逵総じて二十二座、春秋二仲、行積奠之礼。」初、以儒官自為祭主、直云博士姓名、昭告于先聖。）

とあり、常祭として行われていた。つまり、宋代においては、皇太子が行う積奠を菌胄といい、常祭として行われている孔子祭を積奠として、完全に呼び分けている。また、『冊府元龜』を見ても、儲宮部に

菌胄の項目があり、そこで取り上げているものは全て皇太子の積奠についてである²⁶。

しかし皇太子による積奠、つまり菌胄は、唐の玄宗の皇太子瑛を最後にほとんど行われることはなくなり、孔子祭祀としての積奠だけが、現在も存在しているのである。

おわりに

積奠が魏晉時代に行われるようになったのは、松浦氏がいうように、皇太子の後継者としての正当性を儀礼的象徴によって表示しようとしたことにある。

南朝になると皇太子の多くは監国や政務に関わる前に積奠を行うようになる。北朝という敵国が隣接しているということは、国内の混乱が滅亡へと繋がる可能性があるため、皇帝に有事があった時、後継者である皇太子の存在は非常に重要であった。つまり南朝は、積奠によって皇太子が実権を担えるだけの知識があることを百官に示し、有事に備えたのである。

時代が下り、唐の皇太子による積奠は、学に入る礼（＝積奠）ではなく、学に入るために守るべきであった礼の菌胄を取り上げて、皇太子が皇帝になるための権威付けとして意識されるようになっていった。菌胄は長幼の序を尊ぶということを表し、これは皇帝にとっても重要な要素であった。また、長子でない皇太子が行う場合については、長子としての身分が付け加えられることを意味した。

唐という統一王朝が成立し、皇太子の必要性は南朝に比べて低くなっていく。その中で皇太子の権威も低下していき、皇太子の廃立が頻発した。唐の皇太子は他の王朝と比べても異常に廃立が多く、その地位は非常に不安定なものであった。それを表す史料が、『旧唐書』卷九五、讓皇帝憲伝にみえる。

睿宗踐祚するに、左衛大將軍に拜せらる。時に將に儲貳を建てんとし、成器の嫡長なるを以てするに、而るに玄宗韋氏を討平するの功有れば、意久しく定まらず。成器辭して曰く、「儲副なるものは、天下の公器なり。時平たれば則ち嫡長を先にし、国難たれば則ち功有るに帰す。若し其の宜を失えば、海内失望し、社稷の福に非ず。臣今敢えて死を以て請わん。」と。

（睿宗踐祚、拜左衛大將軍。時將建儲貳、以成器嫡長、而玄宗有討平韋氏之功、意久不定。成器辭曰、「儲副者、天下之公器、時平則先嫡長、国難則帰有功。若失其宜、海内失望、非社稷之福。臣今敢以死請。」）

ここでは、睿宗の嫡長子である成器が皇帝となるべきであったが、韋后の篡奪を防いだ功績によって三子であった隆基が立太子されているのである。ここでは様々な政治的暗躍があったかもしれないが、皇太子を選ぶ際に、功績が理由になっているということは確かである。立太子の理由が功績に帰されるのであれば、他の皇子でも皇太子になれる可能性は充分にあった。よって齒胃の礼を百官の前で示すことで、

皇太子自身が他の皇子よりも後継者たるにふさわしいということを天下にアピールする必要があったのである。そのため、唐代はそれ以前と比べ積奠を行う皇太子の年齢が高かったと考えられる。

皇太子による積奠は、皇太子が次期皇帝たるにふさわしいことを天下に示すものであった。これが安史の乱以後、行われなくなる。これはこの時期から次第に魏晉や南朝に比べて、皇太子の選択の際に、天下への承認の必要性が低くなっていることを表しているように感じられる。この後、宋に至り、皇帝はその権力を集中させていくが、その中で皇太子の存在はどのような意味を持ったのか。これについては次稿に期したい。

注

- (1) 多賀秋五郎『唐代教育史の研究——日本学校教育の源流——』（不昧堂書店、一九五三年）、高明士『唐代東亜教育圈の形成——東亜世界形成史的一側面』（国立編訳館中華叢書編審委員会、一九八四年）、朱澐『事邦国之神祇——唐至北宋吉礼変遷研究』（上海古籍出版社、二〇一四年）。その他にも日本の積奠を唐代の積奠から理解する研究もある。代表的なものは、弥永貞三「古代の積奠について」（一九七二年初出、『日本古代の政治と史料』高科書店、一九八八年所収）、がある。
- (2) 松浦千春「魏晉南朝の帝位継承と積奠儀礼」（『東北大学東洋史論集』九、二〇〇三年）。
- (3) 松浦氏前掲論文、一八一頁。
- (4) 岡部毅史「梁簡文帝立太子前夜——南朝皇太子の歴史的位置に関する一考察——」（『史学雑誌』一一八—二、二〇〇九年）。

(5) 『宋書』（中華書局、一九七四年）の校勘記に従って補う。

(6) 古勝隆一「積奠礼と義疏学」（二〇〇一年初出。『中国中古の學術』研究出版、二〇〇六年所収）、「南齊の国学と積奠」（二〇〇五年初出。同じく『中国中古の學術』研究出版、二〇〇六年所収）、保科季子「漢代における經学講論と国家儀礼——積奠礼の成立に向けて——」（『東洋史研究』七四—四）。

(7) 松浦氏前掲論文、一七二頁。

(8) 岡安勇「中国古代史料に現われた席次と皇帝西面について」（『史学雜誌』九二—九、一九八三年）、一七頁。

(9) 『魏書』卷六七、崔光伝。正光元年冬、賜光几杖・衣服。二年春、肅宗親積奠国学、光執經南面、百僚陪列。『魏書』卷八四、儒林伝。正光二年、乃積奠於国学、命祭酒崔光講孝經、始置国子生三十六人。暨孝昌之後、海内淆乱、四方校学所存無幾。永熙中、復積奠於国学、又於顯陽殿詔祭酒劉歊講孝經、黃門李郁說礼記、中書舍人盧景宣講大戴礼夏小正篇、復置生七十二人。

(10) 『魏書』卷八四、儒林伝。永熙中、復積奠於国学、又於顯陽殿詔祭酒劉歊講孝經、黃門李郁說礼記、中書舍人盧景宣講大戴礼夏小正篇、復置生七十二人。及遷都於鄴、国子置生三十六人。

(11) 『隋書』卷七五、儒林伝。天子乃整万乘、率百僚、遵問道之儀、觀積奠之礼。

(12) 『新唐書』卷十四、礼楽志。皇帝視学、設大次于学堂後、皇太子次于太次東。『大唐開元礼』卷五二、皇帝皇太子視学。

(13) 多賀氏前掲論文、二六—三〇頁。また高明士前掲論文、二〇九頁。

(14) 『大唐開元礼』卷五三、皇太子積奠於孔宣父。典設郎設皇太子便次於廟東、西向、又設便次於学堂之後、隨地之宜。

(15) 『大唐六典』卷二一、太学博士に、「其束脩之礼、督課・試拳、如国子博士之法。」とあり、四門博士、律学博士、書学博士、算学博士も同様である。

(16) 皇子は相者が引き、学生は賛礼が引く。また奠るものも、皇子は脩とあるものが、学生では脯とされている箇所があるだけである。意味は同じであり、皇子と学生で大きな差異はない。

(17) 『三國志』卷四、高貴郷公紀には、高貴郷公が太学で『易』や『尚書』、『礼記』について儒学者と議論を行った様子が残されている。

(18) 古勝氏前掲論文では、積奠が入学の儀であったことを注で述べている。しかしその根拠は全く述べられていない。

(19) 松浦氏前掲論文、一八一頁。

(20) 蓋金偉『漢唐官学礼研究』博士論文、二〇〇七年、第二章「積奠礼、南胃礼」、九四頁。

(21) 古勝氏前掲論文、三二二頁。

(22) 『唐大詔令集』卷三二、節愍太子諡冊文。皇帝若曰、咨爾故皇太子重俊、業隆繼体、才膺守器、辨日高視晉儲、防年遐吞漢兩、撫軍監国、皇基攸固、南胃問安、聖因惟永、頃以讒邪浸潤、恩礼疎薄、外迫伊戾之謀、中啓驪姬之譖、彼則兇計斯甚、搖動元良、爾乃誠心密運、掃除悖德、興晋陽之甲、以罪荀寅、擁漢闕之兵、而誅趙虜云々。『唐大詔令集』卷二七、立郢王為皇太子制。樹之后王、所以輯寧黎獻、承之儲副、所以安固宗祧、故能崇四術之科、為万国之本、長幼君臣之序、南胃知帰、温文恭敬之風、群生攸属、古之制也云々。

(23) 『旧唐書』卷七、睿宗紀。（景雲二年八月）丁巳、皇太子積奠於太学。『旧唐書』卷七、睿宗紀。（景雲三年二月）丁亥、皇太子積奠於国学。

(24) 劉宋の劉劭は、元嘉三二年（四四五）に積奠を行い、その四年後の元嘉二十六年（四四九）に監国を行っている。『宋書』卷十五、礼志。（元嘉）二十六年二月己亥、上東巡。…（中略）…其時皇太子監国、有司奏儀注。）

南齊の長懋（文惠太子）は、永明三年（四八五）に積奠を行っており、これは立太子されて三年後である。文惠太子については監国の記載は見られないが、『南齊書』卷二一、文惠太子伝に、「太子年は過立より

始め、久しく儲宮に在り、政事に参^{まゐ}るを得れば、内外の百司、咸な旦暮繼体と謂う（太子年始過立、久在儲宮、得参政事、内外百司、咸謂旦暮繼体」と述べられており、立太子後まもなく釈奠を行い、その後政事に関わっていたことがわかる。

梁の統（昭明太子）は、『梁書』卷八、昭明太子伝に、「太子元服を加えてより、高祖便ち万機を省^みしむ（太子自加元服、高祖便使省万機）」とある。統の元服は天監十四年（五一五）で、釈奠の六年後である。

同じく梁の簡文帝は、統が薨じた後に急遽皇太子となっており、武帝の在位期間が長く、立太子されたときすでに三九歳であった。そのためか彼は、『陳書』卷三三、殷不害伝に、「大同五年（五三九）是時朝廷の政事多く東宮に委ね（是時朝廷政事多委東宮）」とあるように、早くとも大同五年には政務に関与していた。釈奠は大同七年（五四一）に行っている。

『礼記』月令には、「天子乃帥三公・九卿・諸侯・大夫親往視之。仲丁、又命樂正入学習舞。」とあり、その疏に、「以大胥云「舍業合舞」、舍即釈、故知釈業在合舞之前。」とあって、舍業は釈業であることがわかる。釈業については、『礼記』文王世子に、「始立学者、既興器用幣、然後釈業。不舞不授器。」とあり、その注に、「釈業礼輕也。」とあることから、釈業は釈奠よりも軽い礼であると考えられていた。

保科氏は前掲論文で、「少年皇帝・皇太子が自ら講論することによって天下に顯示されるべきものは、皇帝たる資質や帝位継承の正統性ではなく、天子による教化という、儒教に基づく中国皇帝政治の理念そのもの（二四頁）」であると述べ、松浦千春氏の論を否定している。確かに釈奠には「天子による教化」という理念があっただろう。しかし西晋の皇太弟・皇太孫の出現や南朝の皇太子の権力の拡大と、釈奠の記載がほぼ同時期に現れていることは、やはり釈奠が「天子による教化」以上の役割があったと考える。

附表 南北朝・隋唐の釈奠と主祭者

番号	王朝	主祭者	年齢	主な典拠
1	宋	元嘉二二（四四五）年 皇太子（劬）	二〇	『宋書』卷一七、礼志。
2	南齊	永明三（四八五）年 皇太子（長懋）	二八	『南齊書』卷九、礼志。
3	梁	天監八（五〇九）年 皇太子（統） （長懋）	九	『梁書』卷八、昭明太子伝。 『陳書』卷三四、杜之偉伝。
4		大同七（五四一）年 皇太子（簡文帝）	三九	『陳書』卷五、宣帝紀。
5	陳	太建三（五七二）年 皇太子（後主）	一九	『陳書』卷六、後主紀。
6		至德三（五八五）年 皇太子（胤）	一三	『魏書』卷六七、崔光伝。
7	北魏	正光二（五二一）年 明帝	一二	『魏書』卷一一、出帝紀。
8		永熙三（五三四）年 孝武帝	二五	『北齊書』卷三一、王晞伝。
9	北齊	？ 皇太子（百年）	？	『隋書』卷四六、楊尚希伝。
10	北周	？ 太祖	？	『周書』卷七、宣帝紀。
11		大象二（五八〇）年 宣帝	二二	『隋書』卷七五、儒林伝。
12	隋	開皇初 皇太子（勇）	？	『旧唐書』卷二四、礼儀志。
13	唐	武德七（六二四）年 皇太子（建成）	三六	『旧唐書』卷二四、礼儀志。
14		貞觀一四（六四〇）年 皇太子（承乾）	二一	『旧唐書』卷三、太宗紀。
15		貞觀二一（六四六）年 皇太子（高宗）	二一	『旧唐書』卷二四、礼儀志。
16		總章元（六六八）年 皇太子（弘）	一七	『旧唐書』卷五、高宗紀。
17		永隆二（六八二）年 皇太子（中宗）	二六	『旧唐書』卷七、睿宗紀、『旧唐書』卷二四、礼儀志。
18		景雲二（七一）年、 景雲三（七一二）年 皇太子（玄宗）	二六、 二七	『旧唐書』卷二四、礼儀志。
19		開元七（七一九）年 皇太子（瑛）	一〇	『旧唐書』卷二四、礼儀志。